

L・L・ジェーンズ

「アメリカの小楠」の光と影

本井 康博

(同志社史料室)

●横井小楠とL・L・ジェーンズ

「肥後の維新」の立役者は横井小楠とL・L・ジェーンズである。熊本英学校（海老名弾正校長）出身のクリスチャン医師、福田令寿は前者を「東洋のゼーンズ」、後者を「米国の小楠」と呼ぶ（同『熊本追懐録』一二二頁）。小楠の暗殺直後、「堯舜孔子の道を明らかにし、西洋器械の術を尽くす」という彼の遺志とまさに「同じ目標」を抱いて来日したのがジェーンズであった（F・G・ノートフェ



L. L. ジェーンズ（1885年撮影、
『アメリカのサムライ』から）

ルファー著・飛鳥井雅道訳『アメリカのサムライ』一五六頁。以下「サムライ」。

である。同校は医学校と並んで小楠門下（実学党）が取り組んだ（肥後の維新）の看板プロジェクトである。大平は父の死後、養父となった小楠の勧めで兄の左平太と海軍兵学校に留学した。その時、世話になったG・H・F・フルベッキ（在東京）に退役軍人をアメリカから教員に招く斡旋を要請した。白羽の矢を立てられたのが、陸軍士官学校卒のキャプテン（陸軍大尉）・ジェーンズであった。

彼の名は日本クリスト教史では「熊本バンドの父」として周知である。「札幌バンド」の産みの親、W・S・クラークと

双壁をなす。二人は「外来教師の両横綱」である（徳富蘇峰『三代人物史』五〇三頁）。

おまけに驚くほど酷似する。①非宗教学校（国公立）に招聘されたアメリカ人校長、②平信徒だが宗教的業績はミッシェン・スクール外国人教員や宣教師以上、③南北戦争（北軍）に従軍、④妻は宣教師家系、⑤帰国後は不遇、⑥アメリカでの知名度と評価は極めて低い、⑦要するに日本での活躍が黄金時代、なのである（拙稿「新島襄とW・S・クラーク」『クリスト教社会問題研究』五二参照）。

●「奉教派」と「正義派」

熊本時代のジェーンズの感化は大きく、クリスト教に傾斜する洋学校生徒が多数生まれた。彼らは一八七六年一月三〇日、郊外の花岡山に登り、「奉教趣意書」（新島遺品庫収蔵）を読み上げ、信仰結束を誓い合った。海老名たち三十五人がこの誓約書に署名した。「花岡山バンド」、すなわち「奉教派」の誕生である。

すべては小楠からであった。彼から甥二人の洋行が生まれ、その甥から洋学校が生まれ、そして洋学校からクリスト教が生まれたのである（徳富蘆花『竹崎順子』二三一頁、福永書店）。クリスト教に開眼した者にはかつてのクリシタン並みの「迫害」が待ち受けていた。

好例は小楠の遺児、横井時雄で、座敷牢に押し込められたり、自殺を強要された。かくして花岡山の一件は社会問題化し、廃校ならびにジェーンズの解職にまで発展した。

残された問題はクリスト教にかぶれた在校生の転校と卒業生の進学、およびジェーンズの再就職である。

まず前者であるが、金森通倫を先頭に多くは同志社に入学した。彼らは、京都では「熊本バンド」と呼ばれた。その中には異色の人物も混じる。花岡山で「奉教派」が集会を開いた日、危機感を抱いた反クリスト教派の生徒は、水前寺公園に結集し、「正義派」を名乗った。吉田（宇野）作哉、高道竹雄ら三十六人である。吉田は海老名に公開論争を挑んだが、ほどなく入信し、海老名らと同志社に入

学し、「熊本バンド」となった（孫のひとりが榊原英資氏夫人）。高道家の場合も孫が同志社を出て牧師となっている。高道基氏（元神学部教授）である。

ほかに、熊本からいったんは開成学校（東京大学）へ進んだものの、同校の反クリスト教的な校風に反発して中退し（「正義派」の横井時敬はそのままだ）、同級生が進学していた同志社に転校した山崎為徳や横井時雄のようなケースもある。徳富蘇峰も同じく迂回組である。最終的には同志社入学者の総数は四十人近くにのぼった。

●「熊本バンド」

同志社は彼らの入洛より半年前に「宗教的首都」にようやく開校したばかりのささやかな私塾に過ぎない。俊才揃いの「熊本バンド」の入学はまさに「千天に慈雨」であった。ジェーンズは回顧する。教え子たちは「同志社に対して影響を及ぼしはじめ、新島（襄）氏と一体となつて、大学としての精神的基盤も、大学の研究教育そのものも、ほとんど彼らの手



熊本洋学校のクリスチャン・グループ（大半が同志社英学校に進学した。1876年6月10日撮影・同志社社史資料室蔵）

で作っていた」（『ジェーンズ 熊本回想』改訂版、一二六頁。以下『回想』）。

事実J・D・デイヴィスは「同志社をして今日の同志社たらしめるよう助けたのは彼らであった」と証言する（北垣宗治訳『新島襄の生涯』九一頁）。徳富兄弟も同断である。蘇峰が「同志社の大黒柱」ができたのは彼らの尽力、と言えば（『三代人物史』五一―一頁）、蘆花もまた彼らが「同志社の心核」となったと認める（『竹崎順子』二三八頁）。

それゆえ、新島が『百万の援兵』（『三代人物史』五一―二頁）を送り込んでくれたジェーンズに対して、「あ

なたの熊本の教え子たちが同志社を救ってくれました。実際、同志社を大学にしてくれる者は彼らなのです」と目をうるませて直接、感謝したのも頷ける（『回想』一二六頁）。

極論すれば、同志社は熊本洋学校の「複製」である（『サムライ』二八八頁）。少なくとも熊本からの生徒には、熊本洋学校の「延長」であった（『蘇峰自伝』八一頁）。同志社の第一回卒業生十五人はすべて神学生、しかも「熊本バンド」である。さらに卒業後、小崎弘道、横井時雄、下村孝太郎、海老名弾正、金森通倫、宮川経輝、浮田和民、市原盛宏、森田久萬人^{くまんじん}たちが同志社で社長（総長）や校長、教頭、教授などの要職に就いたのはよく知られている。

「複製」と言えば、共学もそうである。熊本では小楠の遺児、横井みや（後に海老名夫人）が徳富初子（蘇峰の姉。後に湯浅治郎夫人）と共に男子と机を並べた。「日本初の共学」である。彼女らは同志社でも女学校の授業に飽き足らず、男子校に通った。同志社の共学もまた早い。

●ジェーンズと同志社

ところで、なぜジェーンズは同志社に教え子を送ったのか。それまで新島とはもちろんデイヴィスとも面識はない。生徒受け入れをデイヴィスに打診した書簡には、「私のことはご存知ないと存じます」とある（『サムライ』二七〇頁）。受理したデイヴィスも、筆跡、差出人とも心当たりはまるで無かった、と告白する（『新島襄の生涯』八一頁）。

ジェーンズ自身、回想録でも「どういう縁で知ようになったのか、私は当時、京都に新島という優れた人物がおり、そのアメリカ留学で得た識見を生かして、日本の青年たちを教育したいという考えを持っていることを聞いていた。また、その同じ京都に私と同じように南北戦争に参戦した経験を持ち、今は組合教会派の宣教師として活躍中のデビス氏がいることも知っていた」と述べている（『回想』一一七頁）。

ジェーンズの記憶は飛んでいるが、実

は彼は同志社情報を長崎の宣教師（オランダ改革派）、H・スタウトから入手している。花岡山集会の直後に出されたスタウトへの書簡に「新島やデイヴィスなどが京都でトレーニング・スクールを開校したことを初めてあなたから知らされた」旨の記述がある（『回想』一七〇頁）。

同志社のD・W・ラーネッドは、一年早くても遅くても「熊本バンド」の入学（一八七六年夏である）はありえなかった、と認める。一八七五年夏では同志社は開校前だし、一八七七年夏では例の「神風連の乱」後だからである。ちなみに神風連（敬神党）の指導者、辻橋源助（神官）の孫（三郎）は国学院に進んだものの、キリスト教に入信し、同志社高等学校や神戸女学院で教鞭をとった。

●ジェーンズ再就職と離婚訴訟

次に失職後のジェーンズであるが、一八七六年秋に大阪の官立英語学校に再就職できた。契約満了後は同志社が予定されていた。「熊本バンド」の指導にデイヴィスや新島がてこずった話は有名で、

デイヴィスなどはそのために病気になったり、「登校拒否」に陥った、との伝説さえある。その手こわい連中を一人で指導してのけた辣腕の指導者を同志社教員に迎える、これは「夢の人事」であった。とりわけ新島は念願の総合大学を託すべき人物として彼に大きな期待をかけた。新島は「あなたが、あなたこそが、私が長年いできてきた夢を実現させることを可能にしてくれました。わが日本国が必要とするような幅広い、かつ深い、普通教育の本当の大学を作るという私の夢を」とジェーンズに告白したという（『回想』一二四頁）。

ところが、同志社就職の件は頓挫した。保養のため大阪から一時帰国した際、妻（ハリエツト）の父親から「熊本での不貞」と「性病感染」を理由に離婚訴訟を起されたからである。判決は一八八四年一月に出て、ひとまず離婚が認められた。ジェーンズの「罪」は確定し、「名声」は地に落ちた。当然、同志社への道も閉ざされた。

実は「夫の不貞」は妻の妄想らしかった。ジェーンズにとってさらに不幸なこ

とは、岳父（H・M・スカッター）が大物牧師であったことである。彼の一族は宣教師として海外で送った年数が延べ七百年以上、というアメリカン・ボードとしての名門宣教師家系なのである。そもそも、ミッションから見てジェーンズごとき「馬の骨」が、洋学校教員に拔擢され高給（月四百円！）が取れたのも、有力者たる義父の推薦（蘇峰は「夫人の縁故」という）があつたればこそ、であつた（拙稿「スカッター家の人びと」、『同志社談叢』七参照）。

そのためアメリカン・ボードは原告のスカッターを支持し、娘婿の「不貞」を疑わなかった。かつての救世主は今や



ハリエット（ジェーンズの2度目の妻、
『アメリカのサムライ』から）

一八九六年について決裂し、ヒトとカネのパイプが遮断された。宣教師は同志社から総退陣し、神学校を別個に立ち上げた。同志社は貧血状態に陥り、神学校は閑古鳥が鳴き、病院や看護学校は手放さざるをえなかった。

こうした関係悪化の底流にはジェーンズの影が確実に落ちていた。一八九〇年代の同志社衰退の要因は、新島の死や国粹主義の台頭（キリスト教反動）という「外患」だけではなかった。「内憂」がこれを加速したのである。神学的にも同志社の（正統的）キリスト教離れ、すなわちハーヴァード化（ユニテリアン化）はジェーンズと彼の教え子がめざした路線でもあつた（『サムライ』三四二頁）。

ジェーンズは教え子の手を借りて同志社の宣教師たちにリベンジしているかのようであった。蘆花はジェーンズの来日を「日本が米国に負ふ悠久な感謝のひとつ」と特筆するが（『竹崎順子』二三七頁）、諸手を挙げて、とはいかない事情もあるのではないか。

「福音の敵」、「狂人」に朽ちてた（『サムライ』二八六頁、三一〇頁）。デイヴィスら日本ミッションのメンバーも基本的には同じスタンスに立った。ここにいたってジェーンズは「私のまったくの認識不足から、人もあろうにこのデビス氏に」教え子を託したことを後悔するに至った（回想『一二五頁』）。

●離婚訴訟の波紋

ところで先の離婚訴訟は同志社にも思わぬ余波を及ぼした。離婚後、社会的に葬られ、田舎で逼塞していたジェーンズを訪ねて、訴訟の「真相」を知った「熊本バンド」の浮田和民は、恩師の不遇とミッションの不当な取り扱いに憤慨して、日本の新聞に情報を送った。帰国後、さらに旧友、小崎弘道が編集する『六合雑誌』に「外国宣教師論」を寄稿した。日本の宣教師の目には宣戦布告と映った。

義憤に駆られた「熊本バンド」、すなわち「ジェーンズ派」は恩師の名誉回復や募金・求職活動に奔走した。小崎は第

三高等中学校に英語教員の口を探り当てた。ジェーンズは思いがけなくも京都（吉田）に就職できたのである。入浴した「伝説のヒーロー」に同志社の学生はさっそくチャペル講演（三回連続）を依頼した。当日、ジェーンズは、学生には「My friends」、そして宣教師には「My enemies」と語りかけた。

講演はキリスト教・宣教師攻撃に終結した。怒ったデイヴィスは「戦闘は始まった」と市原盛宏校長代理（校長の小崎は渡米中）に講演中止を申し入れた。が、市原は「主催者は学生サークル」と取り合わなかった。小崎にしる、市原にしる「熊本バンド」には恩師を糾弾する理由は何ひとつなかったはずである。

●ジェーンズの落とす影

おまけに新島の死後、同志社の牛耳をとった彼ら「ジェーンズ派」は、ナシヨナリズム旺盛で、宣教師でもあつた新島とは相違してアメリカン・ボードからの独立を画策した。かくして両者の溝は深まる一方であつた。結局、横井が社長



熊本時代のジェーンズ旧邸（現ジェーンズ記念館。2003年10月3日撮影）

L. L. ジェーンズ（Leroy Lansing Janes）（1837.3.27～1909.3.27）

オハイオ州ニューフィラデルフィアで陸軍大佐の子として生まれ、陸軍士官学校に学ぶ。卒業と同時に南北戦争（北軍）に従軍し、砲兵大尉（captain）となる。退役後もCaptain Janesと呼ばれる。戦後、メリーランド州で農業に従事していたが、1871年、家族3人と来日し熊本洋学校教師となる。全科目をひとりで、しかも英語（通訳なし）で教えた。生徒の中からキリスト教に傾斜した「花岡山バンド」が出たために、学校は廃校、自身も契約満了を契機に失職した。この時、彼が同志社に託した信徒学生が「熊本バンド」である。大阪英語学校（後の第三高等中学校）で英語教師を務めた後、1877年に一家（6人）して帰国した。1893年、京都に移転していた第三高等中学校（後の三高）の英語教授に就任。任期半ばで鹿児島島の造士館高等中学校（後の七高）に転じるが、翌年、三高に復帰した。1899年に帰国し、カリフォルニア州に住むが、病气や事業失敗のため晩年は不遇であつた。72回目の誕生日に心臓発作で急死。遺言により遺灰は近くの山に蒔かれた。